

# Black Lives Matter の言語学

## — 訳文の検討と試訳の提示 —

谷 光 生

### 1. はじめに

2020年5月、米国ミネソタ州ミネアポリスで発生した白人警官による黒人男性暴行死亡事件は、黒人差別問題とも連動し、世界的規模の抗議活動に発展した。このことは日本においても各種メディアで大きく取り上げられ、2013年以降、黒人差別撤廃を訴える政治社会運動として国際的な潮流を成しつつあったブラック・ライブズ・マター運動 (the Black Live Matter movement) が、衆目を集める端緒ともなった。

日本では、同運動そのものはもとより、それにおいてスローガンとして用いられる英語表現「ブラック・ライブズ・マター」(Black Lives Matter) についても、その訳文という点から、ジャーナリスト・翻訳家・政治社会学者そして一般の人々らの関心を呼んだ。なかんずく、訳文を「黒人の命は大切だ」とするのか「黒人の命が大切だ」とするのか、あるいは「黒人の命も大切だ」の方がよいのかまったく別種の訳を採用すべきなのか、といった翻訳上の問題が争点となった。

このような論争が英語学や日本語学などの理論言語学と関連を持つものであることは言を俟たないにもかかわらず、不思議なことに、その方面の専門家が自身の見解を披歴することはこれまでになかったように思われる。本稿はその間隙を埋めるべく、語学的な視点から原文と訳文について若干の考察を行うものである。

以下、英語表現「ブラック・ライブズ・マター」の英語における表記方法について手短にまとめた後、同表現に対する主要な訳文を統語上のパターン

から整理し、それらの訳文の妥当性について「原文の意味をより忠実に伝えただけかどうか」という点から検討する。しかるのち、「は」「が」などの助詞の意味機能や英単語「マター」に存する構文的性質を確認のうえ、最終的に妥当と考えられる訳語を提示する。最後に、それまでの考察から示唆される今後の英語教育について、ごく簡単に触れる。

## 2. 「ブラック・ライブズ・マター」の表記方法とその意図について

「ブラック・ライブズ・マター」の英語における表記方法については、日本の各種メディアで取り上げられることはなく、同表現の訳文をめぐる議論においても触れられることはなかったようである。しかし、表記方法は同表現の書記言語における特徴として把握すべきことであり、表記の違いに準じた意図の違いも認められるため、ここで触れておく。

「ブラック・ライブズ・マター」が特定のスローガンや声明であったり、特定の社会政治的運動であったりする場合、それは固有名もしくはタイトルとしての扱いを受け、次の例に示されるとおり、各単語の最初の文字が大文字化される。

- (1) a. When a scholarly publisher endorses the statement that Black Lives Matter, especially in the context of current societal tensions in the US and other countries, it needs to do more than just echo it. (WWW)
- b. It's worth noting that not every protest or demonstration is part of the Black Lives Matter network, as some may be organized by people simply using the movement's name. (WWW)

一方、「ブラック・ライブズ・マター」が特定のスローガンや社会政治運動を指すのではなく、事実確認的発話 (constative utterance) (の一部) であるような場合、次の例に示されるとおり、大文字化・斜体化などの特別な扱いを受けず、ごく普通の文としての表記方法が採用される。<sup>1</sup>

- (2) a. Yet when anyone voices concerns with these radical ideas, we're met with a very convenient reply: "But don't you think that black lives matter?" (WWW)
- b. "What we're saying... is all lives can't matter until black lives matter." (WWW)
- c. Until Black lives matter, let us pray.<sup>2</sup> (WWW)

以上のとおり、表記の違いに準じて意図は異なるものの、これらの差異は日本語への訳出作業に大きな影響を与えるものではない。と言うのも、一つの表記およびその意図に基づき、固有名もしくはタイトル的な表現として「ブラック・ライブズ・マター」を訳出しても、二つ目の表記およびその意図に基づき、通常の文として「ブラック・ライブズ・マター」を訳出しても、統語上のパターンや訳語の選択などに関して違いが現れず、どちらにおいても結局「黒人の命は大切だ」「黒人の命も大切だ」などのような訳文に落ち着くことになるからである。ただし、固有名もしくはタイトル的な表現であることを日本語の表記ないし訳文にもあえて反映させたい場合は、次のように、カギカッコを用いてもよいかもしれない。

### (3) 「黒人の命は大切だ」運動

英語での表記やその意図が訳文に与える直接的な影響はないと言えるので、以下の節ではそのような差異を捨象のうえ、議論をすすめることとする。

### 3. 「ブラック・ライブズ・マター」の各種訳文とその妥当性について

「ブラック・ライブズ・マター」に対する訳文として提案されているものは数多くあるが、それらはおおよそ次のような統語上のパターンのもと、分類することができる。<sup>3</sup>

(4) 「主語+述語」のパターン

- a. 黒人の命 {は／が／も／こそ} 大切 ( {だ／です} )。
- b. 黒人の命 {は／が／も／こそ} 大事 ( {だ／です} )。
- c. 黒人の命 {は／が／も／こそ} 重要 ( {だ／です} )。

(5) 「目的語+述語」のパターン

- a. 黒人の命を粗末にするな。
- b. 黒人の命を軽く見るな。
- c. 黒人の命を尊重しろ。

(6) その他のパターン

- a. 黒人の命にも価値がある。
- b. ブラック・ライブズ・マター。

以上の分類に従い、これらの訳文の妥当性について検討する。<sup>4</sup> なお、ここでの妥当性を計る基準は「語学的に見て、訳文が原文の意味をより忠実に伝えているかどうか」というもので、訳文が意識に傾き過ぎたり、原文の意味を十分にすくい取れていなかったりする場合は妥当性に欠けると判断する。幸い、原文が短いため、訳文の日本語としての美しさやなめらかさなどと言った翻訳の技術的側面については議論する必要がなさそうである。

(4) は「主語+述語」のパターンで、このパターンによる訳文がさまざまなメディアで最も目にする機会が多い。原文の「ブラック・ライブズ・マター」が主語で始まるのだから、その訳文に「主語+述語」のパターンをあてはめるという訳業は自然なことで、また妥当な訳文となり得る。と言うのも、原文とここでの訳文の間には統語構造上の並行性がある程度保たれ、意味構造においても両言語間に一定の同一性が見込まれるからである。

ただし、ここでのパターンには、主語をマークする助詞の可能性がさまざまにあり、またそれらの助詞にはそれぞれに固有の意味機能が認められるこ

とから、若干の議論が交わされている。この点に関しては、次の第4節で取り上げることとする。

ここでのパターンを使った(4)の訳文は、いずれもその述語として形容動詞が用いられているため、文末に活用語尾の「だ」「です」が現れる可能性を持つ。このような格式・丁寧さの度合い (levels of formality and politeness) が訳文に与える影響について、多少の議論が本来あってしかるべきだが、管見の限り、そのようなものはない。

原文には、見てのとおり、格式・丁寧さの度合いを示す要素が認められないのだから、そのような度合いが示されない訳文がより妥当であると言える。ところが、(4)においては、「だ」か「です」のいずれかの活用語尾が採用されるか、あるいはそれらの語尾が除かれた尻切れトンボ的な訳文 (語幹のみで終端をなす文) となっている。どれも妥当とは言い難く、このような選択を迫られない訳文が望まれる。

(5)のパターンは、次の第4節で検討することとなる助詞をめぐる問題を回避できるという点で、優れた訳業と言えるかもしれない。が、その一方で、ここでの訳文は原文を忠実に訳したのではなく、意識に近いものであると言える。なぜなら、原文には主語が存在し、全体は平叙文であるにもかかわらず、ここでの訳文には主語の存在が認められず (あるは了解された主語が表面には表されず)、全体は命令文となっており、原文と訳文の間に大きなずれが生じているからだ。また、いくら死亡者を伴う痛ましい事件が背景にあり、緊迫した状況を伝えたいという訳者の思いがあるにしても、「…するな」「…しろ」のような命令文は日本語としては高圧的に響く。(5)のパターンは(4)のパターンに比べ、妥当性に欠ける。

(6)は分類しきれないパターンを集めたに過ぎないが、(6a)は過度の意識であり、原文を忠実に訳したものとは言えない。また、(6b)は訳文とは言えず、訳業を放棄したものとなるが、このようなことが許されるのは原文が多くの人に理解される英語であるからで、たとえば原文がアルメニア語やウルドゥー語であったなら、そのような甘えや逃げ道は閉ざされる。英

語を理解する日本人が多いのと同時に、英語を理解しない日本人も多いのだから、訳業を行う限りにおいて、訳文がすべてカタカナという事態は許されない。(6a) (6b) の訳文はいずれも妥当とは言えない。

以上、統語上のパターンという点から訳文の妥当性を検討したが、次に「ブラック・ライブズ・マター」を構成する三つの単語「ブラック」「ライブズ」「マター」に対して、どのような訳語が選択されているかについて、簡単に考察する。

一つ目の英単語「ブラック」について。カタカナ表記の訳文を除き、すべての訳文が「黒人」という訳語をあてている。これに関して特段の論争はないようで、さしあたり「黒人」で問題ないと言えそうである。

二つ目の英単語「ライブズ」について。カタカナ表記の訳語を除き、すべての訳語が「命」という日本語をあてている。なお、紙野 (2020) によると、坂下史子氏の発言として「直接的には黒人の死に対して出てきたことばだが、“Lives” という単語は、決して命だけを問題にしているわけではない。(中略) だから、これは『命』、『生活』、『生きること』を表しているスローガンだと思う」との意見が紹介されている。英単語「ライフ」(life/lives) 自体にそもそも生命・生活・人生・一生などの異なった意義が存するため、ここでの「ライブズ」の中に命以外の意味を読み込むことも当然可能となり、また黒人がおかれている社会的環境、政治的環境などを顧みればスローガンの趣旨として命以外の意図も含まれるとする解釈はもっともなものである。が、スローガンの趣旨と訳文は区別されるべきで、ここでのスローガンの直接的な契機が黒人の死であったことを考えると、「ライブズ」の訳語は「命」としておくのが妥当であろう。スローガンの趣旨として命以外の意味が関与するのであれば、そこは受け手の解釈にゆだねるのがよいと考えられる。

三つ目の英単語「マター」に関して。カタカナ表記の訳文を除外すると、ほとんどの訳文が形容動詞の「大切 (だ)」などを利用するか、他動詞の「粗末にする (な)」などを利用するかである。英単語の「マター」は自動詞であるが、日本語にはこれに直接的に対応する自動詞が見当たらないようで、

このため形容動詞や他動詞が援用されているようだ。

実は、英単語「マター」には見過ごされがちな構文的性質があり、その性質が「マター」のみならず、「ブラック・ライブズ・マター」全体の訳文にも影響を与えることになる。「マター」の訳語としていかなる語を選択すべきか、また全体の訳文はどうあるべきかについては、第5節以降で検討することとする。

以上、本節では各種の訳文に関して、統語上のパターンおよび訳語の選択という点から、妥当性を検討した。

#### 4. 助詞に関して

前節で検討したとおり、訳文の統語上のパターンとしては(4)の「主語＋述語」のものが妥当と言えるが、このパターンで訳出すると、どのような助詞で主語をマークするのかという問題がすぐに出てくる。そして、この点が「ブラック・ライブズ・マター」の訳文における大きな争点の一つともなっている。本節では、この助詞の問題を取り上げ、訳文における各助詞の妥当性について考察する。

まず、「黒人の命は」のように助詞「は」を用いた場合について。一般に、助詞「は」は、次に例示されるとおり、主題と対照の二つの意義があるとされる。<sup>5</sup>

- (7) a. (太郎がいないね。)彼は台所にいるよ。 (主題の「は」)  
 b. 太郎は台所にいるけど、花子は居間にいる。 (対照の「は」)

主題の「は」は、「は」でマークされる要素がトピックであることを示す。多くの場合、トピックは、(7a)のように、先行文脈で既に話題となっている人物や事柄である。(また、そのような既出のもの以外でも、叙述の対象となりやすいものは、トピックとして「は」でマークされ得る。)対照の「は」は、「は」でマークされる要素が比較の対象となっていることを示すもので、

(7b) では「は」でマークされる太郎と花子が比較の対象とされ、対比されている。

さて、これら二つの意義のうち、対照の意義で「黒人の命は」を解釈すると、明らかに不都合が生じる。と言うのも、黒人の命と黒人以外の命との対比が生まれ、たとえば「白人やアジア人の命は問題ではない」のような含意が生まれるからである。紙野（2020）に「『は』では誤解を招く」という竹沢泰子氏の発言が引用されているが、その誤解とは助詞「は」を対照の意義で解釈した場合に生まれる、この含意のことであろうと推測される。

一方、ここでの「は」を主題の「は」で解釈した場合には、特段の不都合が生じることはない。黒人の命をトピックとして選んでいるだけだからである。実を言うと、原文の主語「ブラック」はある種の前提を受け、主題として機能しているものであるため、訳文の主語においても主題の「は」を用いるのが最も妥当と言える。このことは、次の第5節で見る。

なお、「黒人の命は」の「は」は、主題ではなく、対照の意義で解釈されやすい。その理由は主語内の「黒人」という語に起因する。この語が持つ一連の認知領域（cognitive domain）のうち、人種という認知領域はとりわけ卓立したものだが、この認知領域では基本的に黒人・白人・アジア人の三種類の構成要素しか認められない。<sup>6</sup> この構成要素の数の少なさが、構成要素間での対立を際立たせ、ここでの「は」を対照の意義で解釈させやすいものとなっている。<sup>7</sup>

なお、この点は、多数の構成要素を含む認知領域が関与する表現と比較すれば、うなずけるものとなるだろう。たとえば「ブラック・イズ・ビューティフル（Black is Beautiful）」というスローガンを「黒は美しい」と訳出しても、対照の意義で解釈されやすいとは言えない。それは色という認知領域では構成要素となる色が数多く認められ、それらの色すべてに関する対立が同時には認めがたいからである。

次に、「黒人の命が」のように助詞「が」を用いた場合について。助詞「が」には、次の例に示されるとおり、中立叙述と総記の二つの主たる意義が認め

られる。<sup>8</sup>

- (8) a. 太郎が走った。／太郎がいる。／太郎が病気だ。(中立叙述の「が」)  
 b. 太郎が責任者だ。(総記の「が」)

「黒人の命が」という訳文における「が」は、総記を表すものである点に注意されたい。と言うのも、中立叙述の「が」が用いられるのは、たとえば(8a)の各例が示すとおり、「述部が動作を表すか、存在を表すか、一時的な状態を表すかの場合に限られる(久野 1973: 32)」ため、命の重要性のような恒常的な状態ないし変わらぬ真理を示す表現においては、「が」は総記でしかあり得ないからである。

総記の「が」は、「が」でマークされた要素だけが問題であり、それ以外のものは排除されるという意味を表す。このため、「黒人の命が」のような訳文のもとでは、黒人の命だけが問題とされ、他の人種の命は問題にされないという含意が生まれる。このため、総記の「が」を用いた訳文は到底妥当なものとは言えない。

最後に、「黒人の命」を助詞「も」ないし「こそ」でマークした場合について。「も」で訳出した場合、他の人種の命が既に話題となっていることが前提となる。が、原文にはそのような前提もなければ、「も」に対応する要素も存在しない。このため、「も」を用いた訳文はかなりの意識と言わざるを得ず、妥当性に欠ける。<sup>9</sup>「こそ」の場合は、「こそ」が取り立て詞としばしば言われるとおり、白人やアジア人の命を背景として黒人の命をあえて取り立てたような意味を表すことになる。が、原文にそのような意味や意図がない以上、この訳文も妥当ではないと言える。

## 5. 「マター」に関して

第3節で確認したとおり、多くの訳文において、「ブラック・ライブズ・マター」の「マター」には「大切(だ)」「粗末にする(な)」のような訳語

があてられている。しかし、「マター」をそのように訳出すると、英単語としての「マター」に存する意味が十分にすくい取れず、ひいては「ブラック・ライブズ・マター」全体に妥当な訳文を与えることができないということにつながる。本節は、以下、これらのことについて検討する。

まず、『オックスフォード英語辞典』で「マター」における関連の意義を確認してみよう。すると、次のような記述が目に入る。

- (9) To be of importance; to signify. Usually in interrogative and negative contexts.

(*Oxford English Dictionary* [online], s.v. *matter*)

この記述で重要となるものは、「通常、疑問と否定の文脈において」という注記で、この部分には要するに「マター」は疑問文や否定文の中で用いるのが普通であり、肯定文として用いるのは普通ではないということが示されている。このことに対する例証としては、次のとおり、各種の辞書が否定文を筆頭例として挙げていることを示してもよいだろう。

- (10) a. 'I'm afraid I forgot that book again.' 'It doesn't matter'

(*Oxford Advanced Learner's Dictionary* (2020<sup>10</sup>), s.v. *matter*)

- b. We were late, but it didn't seem to matter.

(*Cambridge Learner's Dictionary* [online], s.v. *matter*)

さらに、COCA コーパスを用い、「マター」の左右三語の範囲内でどのような語が現れやすいのかという点について頻度調査を行うと、総計約27万6千回の頻度のうち、助動詞 *do* が約4万回で最もよく現れ、否定辞 *not/n't* が約3万6千回でその次となる。<sup>10</sup> 助動詞 *do* の場合は、否定文に現れる場合と疑問文に現れる場合の両方が換算されていることを考慮すると、「マター」は否定文で使用されるのが最も普通であると言える。

以上のことから、「マター」には次のような性質があると言える。すなわち、「マター」は否定辞とともに使用される形式が基本であり、その形式に対応する意味は「(潜在的に問題となりそうなことを対象として、それは)問題ではない」ということである。また、「マター」が否定辞なしに単独で用いられる形式は基本的用法から否定辞を削除した派生的なものであり、その意味は基本的用法が持つ意味にマイナスの極性 (polarity) が付与された「『問題ではない』ことはない」という派生的なものになる。<sup>11</sup> これらの構文的とも言える性質をまとめると、次の表ようになる (表中の取り消し線部分は形式面における削除を示す)。

(11)

	基本的用法	派生的用法
形式	「マター」 + 否定辞	「マター」 + 否定辞
意味	問題ではない	問題ではないことはない

なお、「マター」は潜在的に問題となりそうなことを対象とするのだから、その主語は主題として提示されているという点にも注意されたい。

英語表現「ブラック・ライブズ・マター」では「マター」が否定辞なしで使用されているため、その意味は結局「黒人の命が問題ではないことはない」のようなものとなる。このことは、川上 (2020) で紹介されているピーター・バラカン氏 (英語母語話者) の発言からも支持が得られる。バラカン氏は「英語では It doesn't matter (気にしないで、大したことない) の表現をよく使うので、その反対と考えた」と述べている。

「ブラック・ライブズ・マター」は文体的にはやや高度な表現と言えそうで、その表現の要となる「マター」の構文的な性質に気づかぬまま、「大切 (だ)」「粗末にする (な)」のような単純な訳語をあてはめているだけでは、原文の意味を正確に伝えたことにはならず、結果として出てくる訳文は妥当性に欠けたものとなる。

## 6. よりよい訳文を求めて

英語表現「ブラック・ライブズ・マター」をどのように訳出すれば、妥当な訳文が得られるのだろうか。これまでの要点をまとめると、訳出の際には次の点に注意を払う必要がある。すわなち、統語上のパターンは「主語＋述語」で、助詞は主題を表す「は」がよく、その際、対照の意義に解釈されないように配慮する。「だ」「です」のような格式・丁寧さの度合いを明示する表現は避けた方がよい。また、「ブラック」は黒人で、「ライブズ」は命でよい。問題は残る「マター」である。

前節で考察したとおり、単独で用いられた「マター」の意味は「問題ではないことはない」というものだが、これに対応する日本語表現を見出すのは困難である。一つの取っ掛かりは派生的用法となる「マター」自体に対応する日本語表現を探すのではなく、基本的用法である「マター＋否定辞」に対応する日本語表現を求めることである。すると、「どうでもよい」と「たいしたことない」の二つの日本語表現が念頭に浮かぶ。<sup>12</sup> しかも、幸い、これらの日本語表現はそのままで用いるのが普通で（基本的で）、「マター」に対応する「どうでもよくない」「たいしたことなくない」のような否定形は普通ではない（派生的である）と言える。問題となる英語表現と日本語表現を表の形で対応させると次のようになる。

	基本的用法	派生的用法
英語表現	「マター」＋否定辞 「問題ではない」	「マター」＋否定辞 「問題ではないことはない」
日本語表現	どうでもよい たいしたことない	どうでもよくない たいしたことなくない

以上から、「ブラック・ライブズ・マター」の訳文の候補として、次のものを挙げることになる。

- (13) a. 黒人の命はどうでもよくない。  
 b. 黒人の命はたいしたことなくない。

ただし、「たいしたことなくない」は意味が捉えづらだけでなく、原文には存在しないふざけた響きも感じられるため、(13b) の訳文は妥当とは言えない。<sup>13</sup> 本稿では (13a) の試訳を「ブラック・ライブズ・マター」の妥当な訳文として提示することとする。

なお、(13a) では述語として形容詞が用いられているため、格式・丁寧さの度合いに煩わされることもなく、また「どうでもよくない」ということは「何かはどうでもよい」との前提に立つため、助詞「は」が主題を表し、対照の意義に解釈される余地がほぼなくなっている点にも注意されたい。

## 7. 最後に

使用・用法基盤モデル (usage-based model) を採用する言語理論のもとでは、「マター」に (11) のような構文的性質が認められることは、当然の帰結となる。今後の英語教育においては、このようなモデルに基づいた言語理論からの知見を導入し、使用頻度や単語以上の言語単位にも目を向けた指導が必要と考えられる。

### 注

- 1 事実確認的発話とは事実を述べる行為と言い換えられる。Austin (1975<sup>2</sup>) を参照されたい。
- 2 英単語「ブラック」が黒人という意義で用いられる場合、ここでの例のように大文字で始められることが最近の標準になりつつある。これは黒人という人種や黒人が持つ文化・歴史を尊重し、単なる黒色を示す小文字の「ブラック」と区別するためである。この点に関しては Baulder (2020) や Coleman (2020) を参照されたい。
- 3 例文中の記号の趣旨は次のとおりである。波カッコは「波カッコ内のスラッシュで区切られる項目のうちの一つを選択せよ」ということを示し、丸カッコは「丸カッコ内の要素は随意的なもの（あってもなくてもよいもの）である」ということを示す。
- 4 これらの訳文の多くは一般的なものであるため、その初出年月日や訳者の確認が残念ながら取れない。が、たとえば紙野 (2020) によるウェブ上のインタビュー記事による

と、(5a)は竹沢泰子氏によるもので、また川上(2020)による毎日新聞の記事によると、(5b)はピーター・バラカン氏、(5c)は翻訳プロジェクト Letters for Black Lives によるものである。(6a)はウェブ・メディア「フロントロウ」におけるフロントロウ編集部(2020)によるもので、(6b)のようなカタカナ表記の訳文は、紙野(2020)によると、坂下史子氏ならびに中山俊宏氏によるものである。(なお、フロントロウ編集部(2020)は、(6a)の日本語表現「黒人の命にも価値がある」を「ブラック・ライブズ・マター」の訳文とは捉えていない可能性がある。と言うのも、同表現に対して、「『黒人の命にも価値がある』という意味のこの言葉が生まれるきっかけとなったのが[...]」としており、訳ではなく意味と表現しているからである。)

川上(2020)の記事には「毎日新聞は原則として『黒人の命は大事だ』と表記することにしました」との追記も確認できる。

- 5 たとえば、久野(1973)、野田(1996)を参照されたい。
- 6 認知領域とは、言語表現が持つ意味の背景や前提の一種である。Langacker(1987)やLangacker(2008)を参照されたい。
- 7 英語表現の「ブラック・ライブズ・マター」では、助詞「は」のような対照の意義を特別に表示する要素が現れていないため、三つの人種間での対立が顕在化されてはいない。とは言っても、英単語の「黒人」が持つ人種という認知領域において、三人種の対立が際立つことには変わらない。英語圏でも、あえて「黒人の命だけを問題にしているのではない」「すべての命が大切なのは当然である」というような注釈が必要となる現状がそのことを示している。このような現状に関しては、たとえばBBC(2020)を参照されたい。
- 8 この点についても、たとえば、久野(1973)、野田(1996)を参照されたい。
- 9 「黒人の命だって…」のように「だって」という助詞を用いた訳文も存在するようだが、「も」と同様のことが言える。
- 10 2020年11月15日時点での調査による。
- 11 この派生的用法の形式においては、否定辞は存在しないのではなく、削除が適用されたやや複雑な構造を呈する点に注意されたい。また、同用法の意味においても、「問題だ」のように比較的単純な意味が表されているのではなく、「『問題ではない』」ことではない」のような二重否定の複雑な意味が表される。
- 12 前節で引用したピーター・バラカン氏の発言では、It doesn't matter. の意味が「大したことない」であるとされているが、この点にも注意されたい。
- 13 (13b)の末尾「なくない」を「ある」に変換した「黒人の命はたいしたことある」では、さらにふざけた響きを感じられ、妥当な訳文とは言えない。

#### 参考文献

- Austin, John L. (1975<sup>2</sup>) *How to Do Things with Words*, Harvard University Press, Cambridge.
- BBC (2020) "Anti-racism: What does the phrase 'Black Lives Matter' mean?" *BBC Newsround*, July 3, retrieved on Nov. 15<sup>th</sup>, 2020 from <<https://www.bbc.co.uk/newsround/53149076>>.
- Bauder, David (2020) "AP says it will capitalize Black, not white," *AP News*, July 20, retrieved

- on Nov. 15<sup>th</sup>, 2020 from <https://apnews.com/article/7e36c00c5af0436abc09e051261fffff>).
- Coleman, Nancy (2020) "Why we are capitalizing Black," *The New York Times*, July 5, retrieved on Nov. 15<sup>th</sup>, 2020 from <https://www.nytimes.com/2020/07/05/insider/capitalized-black.html>).
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar: Theoretical Prerequisites*, Stanford University Press, Standord.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*, Oxford University Press, Oxford.
- 紙野武広 (2020) 「Black Lives Matter が意味するもの」、NHK News Web, 6月19日、2020年11月15日アクセス。  
[https://www3.nhk.or.jp/news/special/presidentialelection\\_2020/demonstration/demonstration\\_01.html](https://www3.nhk.or.jp/news/special/presidentialelection_2020/demonstration/demonstration_01.html)
- 川上珠実 (2020) 「黒人差別：Black Lives Matter 黒人の命『1. は、2. も』大事 日本語で論争 差別考える契機に」、『毎日新聞』、8月1日、大阪夕刊1頁。
- 久野暲 (1973) 『日本文法研究』、大修館書店、東京。
- 野田尚史 (1996) 『「は」と「が」』、くろしお出版、東京。
- フロントロウ編集部 (2020) 「Black Lives Matter (ブラック・ライヴズ・マター) の意味って？なぜ警官は逮捕されない？」、『フロントロウ』、6月3日、2020年11月15日アクセス。  
[https://front-row.jp/\\_ct/17367329](https://front-row.jp/_ct/17367329)